

道南地方のクリタマバチの被害

館 和 夫 上 条 一 昭

はじめに

道内でクリタマバチが発見され、被害の増加が懸念されるようになってから、10年ちかい年月が経過した。さいわい今日までの被害は比較的小規模にとどまっているが、今後、本道のクリ栽培上大きな障害となることも考えられるので、ずっとクリタマバチの分布の広がり、被害程度、抵抗性品種の選抜などの調査を行なってきた。そこで、これまでの調査結果の一端をのべ、関係者の参考に供したい。

生活史

函館地方におけるクリタマバチの羽化時期は7月下旬からはじまって1箇月間つづき、8月上旬に発生のパークがみられる。室内観察による成虫の生存期間は1～7日であるが、2～3日のものが多い。越冬幼虫はクリの催芽期から展葉期にかけて発育をはじめ、5月以降はゴ

ール(虫こぶ)も急激に肥大して被害が目立つようになる。加害期を終えた幼虫は7月上・中旬に蛹期をむかえ、さらにゴール内成虫の期間を経て羽化してくる。羽化の頃からゴールの一部は腐朽しはじめ、落葉後には乾燥したゴールが樹冠の上に無数に残されて異様な姿を呈する(写真-1)。



写真 - 1 クリタマバチの被害状況 (1973.4 七飯)



図 - 1 クリタマバチの被害分布 (1972)

被害の消長と特性

図 - 1 に示すように、北海道ではじめてクリタマバチが発見された場所は森町で、1964年であった。

その後各地に新しい被害地が確認され、現在では後志および胆振地方の一部にまで侵入している。

なかでも渡島南部の森町および七飯町周辺、西胆振の壮瞥町など、栽培条件が比較的恵まれているとおもわれる果樹地帯を中心に被害がみられることは、注目すべき傾向である。しかし、道内におけるこの虫の分散経過は非常におそく、桧山地方や渡島北部など被害の未発見地域もまだかなり残っており、本州での急激な分散傾向にくらべると、その点、特異な被害傾向を示している。

渡島地方の栽培グリの被害の推移は表 - 1 に示すとおりで、大野平野周辺部の各町村に比較

表 - 1 クリタマバチ被害の推移（渡島管内、栽培木）

市町村	植栽 箇所数	植栽 本数	1966		1968		1970		1972	
			調査本数	被害度	調査本数	被害度	調査本数	被害度	調査本数	被害度
木古内町	11	1,800	270	0	620	0	20	0	500	0
小野町	9	290	180	0.1	400	0.1	920	0.2	360	0.4
七飯町	(23)	(400)	300	0.3	110	0.5	30	0.6	340	0.9
亀田市	(7)	(420)	30	0.8	150	0.3	(70)	0.3	380	0.8
南茅部町	1	300	-	-	300	0	-	-	-	-
森町	30	1,010	210	0.1	300	0.1	80	0.4	120	0.6
八雲町	7	490	260	0	300	0	80	0	60	0
長万部町	1	40	40	0	40	0	40	0	30	0
函館市	(2)	(200)	-	-	-	-	-	-	200	0.3
	91	4,950	1,290		2,160		1,180		1,990	

注 植栽箇所および本数は文献(3)、その他は被害報告書類による。()は調査による補整値。

的多くの被害がみられる。木古内町、大野町など栽培のやゝ多い一部地域に被害がみられないかまたはごく少ないのは調査対象となった栽培品種の構成（抵抗性の有無）によるところが大きいと考えられる。

これらのはかに 1972 年には、後志の余市地区の栽培グりに 33 本、仁木町に 56 本、胆振の壮瞥町で約 2900 本の罹害が報告されており、今後、後志、胆振の被害動向と共に南空知、日高地方などの被害発生の有無が焦点となるであろう。

単木的にみるとクリタマバチのゴールは、侵入の初期には樹冠内側の不定枝などの弱小枝に着生する場合が多く、量的にも少ないが、しだいに樹冠の外側の結果母枝などの主枝や垂主枝に多く着生するようになる。罹害した伸長芽や当年生枝は正常な発達をさまたげられて、奇型化するかまたは短小な罹害被として枯死するものも多く、樹勢はおとろえていく。

本道ではまだ全体が枯死に瀕するような甚しい被害木はみうけられないが、被害がクリ分布の全域に及んでいないため、長期的にみればまだまん延の過程にあるとみられ、今後も、当分の間現在のようにゆるやかな分散傾向と小規模な被害の消長をくり返しながら推移するとおも

われる。

品 種 と 被 害

抵抗性品種への切換えによって、ほとんど問題が解決したかみえた本州方面で、近年抵抗性品種の被害が顕著になり、クリタマバチの被害があらためて問題になってきている。

福田（1961）はクリの品種と被害について分類（表 - 2）しているが、抵抗性品種の罹害状

表 - 2 本州におけるクリタマバチ被害品種および無被害品種の分類

被害品種	養老，霜被，盆栗，柴栗，大正早生，山口早生，笠原早生，中国栗，傍土 350・360・455・461・480，兵庫中国栗，おさや，イタリー栗，彼岸栗，宮川 18・39・44・84・86・100，日の春，大枝中生銀寄，土田甘栗，早生長兵衛，長光寺，屋島，中生丹波，片山，林一号
無被害品種	銀寄，岸根，田尻銀寄，鹿の爪，赤中，今北，金赤，福西，兵庫 493 乙宗，豊多摩早生，小布施 2 号，仙助，山田，ふしお，晩生長兵衛，利平，銀鈴，森早生，田沼，丹沢，伊吹，筑波

注 1．*は一部に抵抗性のももであると推定される。

2．福田（1961）より作製。

況については、佐藤ら（1971）が宮城県で調査した報告がある。それによると無被害もしくは寄生率 10%以下のものは銀鈴，出雲，有磨石槌，豊多摩早生，田尻銀寄，玉造，森早生などであり，調査木中 35%以上の寄生率を示すものは，大和，E - 11，ち - 5，七福早生，錦秋，利平，田辺などである。

中国グリを中心に栽培が進んでいる本道では，被害地帯で調査した品種の大半のものが罹害しており，表 - 3，4 に示すような被害状況となっている。日中交雑（六原）の各系統も同様に被害がみられる。

ニホングリのうち，品種の明らかな調査例は少ないが従来抵抗性品種とされる今北にわずかながら被害がみとめられることは注目されよう。これら調査木の中には，導入後日の浅いものや，被害歴の短いものなどもあり，被害の進行にともなって被害品種はさらにふえることが予想される。

表 - 3 渡島地方におけるクリ品種別クリタマバチ被害の有無（1973）

ゴールがみとめられる	四万騎，今北，兵庫 57 号，日中交雑 7 号，26 号，32 号，日華，H - 5，北冠*，北華*，重鎮*，7*，239*，3*
ゴールがみとめられない	利平，大和，筑波，伊吹，銀寄，岩手 1 号，3 号，西明寺 1 号，2 号，丹沢，森早生，銀鈴，銀太郎

注 道立林試道南分場接木検定林（1968 設定）および森町中沢クリ園（1972 年頃高接）の観察結果による。*は后者の植栽木。

表 - 4 クリ品種別被害状況（渡島地方，1973）

品種別	樹齡 (年)	調査芽数 (個)	寄生率 (%)	品種別	樹齡 (年)	調査芽数 (個)	寄生率 (%)
北冠	7	178	11.2	日中26号	6	248	10.0
北華	7	114	40.4	日中32号	6	183	8.7
日華	7	186	13.4	日中34号	6	294	2.7
重鎮	7	135	71.9	H-5	6	131	35.9
3	7	86	50.0	兵庫57号	6	230	5.7
7	7	239	13.4	四万騎	6	332	4.7
239	7	156	37.8	今北	3	201	2.5
日中7号	6	172	30.8				

注 1. 日中は日中交雑（六原）種。

2. 寄生率は3年生枝まで（4方向から1本ずつ採取）の総芽数に対するゴール数。

クリタマバチ抵抗性木の分離育成は、いままでに被害調査地からの無（軽）被害木の選抜，強制産卵による抵抗性の検定などの方法により，現在までに22系統約160個体の候補木を得た。中国グリを主体とするこれらの中から，クリタマバチ抵抗性のほか，収量や適応性，食味，加工性などにすぐれた特質をもつ個体があらわれるよう念願している。

おわりに

渡島地方の栽培グリを中心に，近年のクリタマバチ被害の状況について，特徴的な事柄を記したが，この害虫の被害動向について関心が高まっている折，この小稿がいくらかでも関係者の参考になれば幸いである。

文 献

福田仁郎 1961 果樹害虫編 527P 養賢堂

上条一昭・鈴木重孝・館和夫 1966 北海道におけるクリタマバチの発生状態 第15回道林務部
研究発表大会論文集：116 - 121

北海道林務部 1969 北海道におけるクリ・クルミの植栽現況

佐藤末吉・鈴木定一 1971 クリタマバチに関する試験 宮城県林試業務成績書

（道南分場・昆虫野兎鼠科）